

橋のホラティウス

トマス・バビントン・マコーリー作

上田エリヤ訳

作者による解説（要約）

読み書きが普及していなかった時代

歴史を保存する数少ない手段の一つとして

ローマにも伝承バラッドがあつたはずだが

ギリシャの詩歌に席巻されて消失してしまった。

公の記録もガリア人の侵入（紀元前390年）によつて失われてしまった。

しかし葬儀で先祖の功績を語る習慣によつて、辛うじて歴史は繋がった。

以下は紀元前のローマ人の伝承バラッドを

当時の人々の立場に立つて再現しようとする試みである。

橋のホラティウス

市の創建360年頃（*紀元前393年頃）に作られた詩歌

一

クルシウムのラルス・ポルセナは

九柱の神に誓った、

タルキニウスの大いなる家に

もはや辱めは受けさせない、と。

（*タルキニウスは王政ローマ最後の王、

エトルリア系だったがローマから追放されていた）

九柱の神に彼はそれを誓った、

そして集合の日を定めた、

そして早馬の使者に命じた、

東から西から南から北から、

我が軍団を招集するべし、と。

二

東へ西へ南へ北へと

使者の馬は速やかに行き、

そして塔と町と田舎家は

ラッパが鳴り響くのを聞いた。

家にいるのは

恥ずべき偽エトルリア人である、

クルシウムのポルセナが

ローマに進軍するとうき。

三

騎兵たちと歩兵たちが

全速力で流れ込んでくる、

数多くの立派な市が立つ街から、

数多くの実り豊かな平原から、

ブナとマツに隠された、

ワシの巣のような、

紫色のアペニンの頂の、

数多くの人里離れた村から／

四

神々しい昔日の王たちのために、

巨人の手によつて積み上げられた

名高い砦が睨みつける

威厳あるヴォルテッラから／

その歩哨がはるかかなたの南の空を

サルディーニヤの雪の山頂が

縁取っていることに気づく

海辺のポプロニアから／

五

金髪の奴隷をたつぷり載せた

マツシリアの三段櫓船の浮かぶ、

西の海の女王

ヒサの貿易港から／

小麦とブドウと花々の間を

甘美なクラニス川が彷徨う地から／

コルトーナの街が塔の王冠を

天に向かつて突き上げている場所から。

六

背の高いオークのドングリが落ちるのは

暗いオーサーの小川／

シミリアの丘の大枝を

むしゃむしゃ食べる牡鹿は太っている／

クリタムヌス川の全ての流れは

牧夫に愛されている／

全ての池の中で鳥取りに最も愛されているのは

大ヴォルシニア湖。

七

しかし今やオーサーの小川に

樵の斧音は聞こえず／

シミアの丘を上る牡鹿の

新鮮な足跡を辿る狩人もおらず／

クリタムヌス川沿いでは乳白色の去勢牛が

見張りもなしに草を食んでおり／

ヴォルシニア湖では

水鳥が安らかに水浴びをするだろう。

八

アレティウムの収穫では、

今年は年寄りが刈り入れをするだろう／

今年はアンプロの少年たちが

混雑した羊たちの中に飛び込むだろう／

そしてルナの大桶では、

今年は笑っている少女たちの白い足の周りで

ぶどうの汁が泡を立てるだろう、

その父親たちはローマに進軍したのである。

九

選ばれた三十人の預言者がいる、

この国の最も賢い者たちである、

朝も夜もいつも

ラルス・ポルセナのそばに立っている／

夜に朝に三十人は

昔の偉大な予言者が

白いリネンの上に右から左に書いた

(＊古代エトルリア文字は右から左へ書く)

詩文について考えを巡らせた。

十

そして三十人が声を一つにして

その喜ばしい答えを告げた..

「進め、進め、ラルス・ポルセナ、

進め、天に愛されし者、

行つて、栄光とともに

クルシウムの王室のドームへ凱旋せよ／

そして、ヌルシアの祭壇の周りに吊るせ

ローマの黄金の盾を。」

十一

そして今や、すべての都市は

全ての男たちを送り出した／

歩兵は八万人、

馬は一万頭。

ストトリウムの門の前には

巨大な軍団が集合していた。

集合の日に誇らしげだった男こそ

誰あろう、ラルス・ポルセナ。

十二

彼の眼下に整列していたのは

エトルリア全軍、

そして、大勢の追放されたローマ人たち、

そして、数多くの頑強な同盟軍／

そして強力な援軍と共に

招集に応えたのは

トスカラン・マミリアス、

ラテン名の王子。

十三

しかし黄色いテヴェレ川のほとりでは

騒動と不安が巻き起こっていた..

すべての広々とした平野から

人々はローマへと逃げようとした。

街の周囲一マイルで

群衆が道を塞いでいた／

二日間の長い夜と昼の間中

恐ろしい光景が繰り広げられた。

十四

松葉杖をついた年寄り、

そして身重の女、

そして自分にしがみついて微笑む赤ん坊を抱いて

すすり泣く母親、

そして奴隷の首の高さの

担架に載せられた病人、

そして鎌と棍棒を持った

日焼けした百姓の一群、

十五

そしてワインの皮袋を積んだ

ラバとロバの群れ、

そして山羊と羊の終わりのない群れ、

そして終わりのない牛の群れ、

そして穀物袋と家財道具の

重さにきしみつつ

すべての怒号飛び交う門に滞っていた
終わりのない荷車の列にとつて。

十六

さて、青ざめた市民たちは

タルペーイアの岩から

列をなして燃える村を

真夜中に赤くなる空を偵察した。

市の元老たちは

昼夜を問わず座っていた、

一時間ごとに数人の騎馬の伝令が

落胆の知らせを持ってやって来た。

十七

東へそして西へと

トスカーナ人の群れは拡がった／
家も柵も鳩小屋も

クルストウメリウムには立つていない。

ヴェルベンナからオスティアまで

すべての平野が荒廃させられた／

アストウルがジャニコロを襲撃し、

そして頑強な守備兵が殺された。

十八

確かに元老院のどこにも、

それほど雄々しい心はなかった、

しかしその悪い知らせが伝えられたとき、

それはひりひりと痛み、鼓動が速くなった。

直ちに執政官は立ち上がった、

全ての元老たちが立ち上がった／

急いで彼らはガウンを身にまとい、

そして城壁の元へと行つた。

十九

彼らは立つたまま会議をした、

川に面した門の前で／

短い時間だったが、推測できるだろう、

沈思あるいは議論するためである。

執政官は厳しく直言した・・

「橋は間違はなく落とさねばならない／

ジャニコロが奪われないま、

町を救う方法は他にない。」

二十

ちょうどその時、斥候が飛んで来た、

恐怖と焦燥に気も狂わんばかりだつた・・

「戦闘準備！戦闘準備！執政官殿・・

ラルス・ポルセナがすぐそこにおります。」

低い丘から西の方へと

執政官は目を凝らした、

そして速やかに空に立ち昇つて行く

黒ずんだ砂塵の嵐を見た。

二十一

そして、近くへ、どんどん近くへ

赤いつむじ風がやつて来る／

そして、大きく、さらに大きく、

その巻き雲の下から、

聞こえて来るのは誇らしげなトランペットの戦争の音色、

踏み鳴らす足音、そしてどよめき。

そしてはつきりと、さらにはつきりと

今、暗闇の中に現れる、
遠く左に、遠く右に、
夜明けの濃青色の微光の中に、
輝く兜の長い隊列が、
槍の長い隊列が。

二十二

そしてはつきりと、さらにはつきりと、
地平線の微かな光の中に、
今や見えることだろう

十二の堂々たる都市の旗が輝いているのが／
しかし、それらすべての中で最も高かったのは
ウンブリア人に恐れられ、
ガリア人に恐れられている、
誇り高きクルシウムの旗。

二十三

そしてはつきりと、さらにはつきりと

今や市民は知ることだろう、

振舞いと胴衣、馬と紋章によつて、

それぞれの勇武のルクモ（*王）を。

栗葦毛の馬上に見られるのは

アルレティアムのシルニウス／

そして他の誰にも振る舞うことのできない剣を帯びているのは、

四重盾のアストウル、

金の帯を締めているトルムニウス、

そして葦の多いトラジメネの砦から来た、

色の黒いヴェルベンナ。

二十四

王旗の傍らで揺らぐことなく、

戦争の全てを見ていたのは、

自ら象牙の戦車に座った、

クルシウムのラルス・ポルセナ。

右輪の傍らにはマミリウス、

ラテン名の王子が騎馬で従っていた／

そして、左輪の傍らに従っていたのは、

恥ずべき行いをした不実のセクストス。

(＊タルキニウス王の息子、いとこの妻を強姦してローマを追われた)

二十五

しかし、セクストスの顔が

敵の間に見えると、

大空を引き裂くような叫び声が

町中から上がった。

女は家の屋根にはいなかった

しかし彼に向けて唾を吐き、シートと言った、

呪いの言葉を叫ばない子供はいなかった、
そしてその小さな拳を振り上げた。

二十六

しかし執政官の眉根は悲しかった、
そしてその言葉には力がなかった、
そして彼は暗い目で城壁を見ていた、
そして暗い目で敵を見ていた。

「橋を落とす前に
彼らの先陣は私たちのところへ来るだろう／
そして一度橋が奪われたなら、
町を救うどのような希望があるだろう？」

二十七

すると、勇敢なホラティウスが言葉を発した、

門の指揮官である..

「この世のすべての人間に

死は遅かれ早かれ訪れます。

ならば、恐るべき薄い勝ち目に

立ち向かうよりも良い死に方があるでしょうか、

先祖の遺灰、

そして神々の神殿のために、

二十八

「そして彼を抱いてあやして眠らせた

優しい母親のために、

そして彼の赤ん坊にその胸で

乳を飲ませる妻のために、

そして永遠の炎を護る

聖なる乙女たちのために、

そして恥ずべき行いをした不実のセクストスから

これらすべてを救うために？

二十九

「橋を引き摺り落としてください、執政官殿、
出来る限り速やかに／

私はあと二人の助けを借りて、

敵を足止めしようと思います。

向こうの狭い橋の袂なら三人で

千人を止められるかもしれません。

さあ、私の両側に立つて、

一緒に橋を守ってくれる人はいますか？」

三十

するとスプリウス・ラルティウスが言葉を発した／
彼はローマ人の誇りだった..

「よし、私はあなたの右側に立とう、

そして、あなたと一緒に橋を守ろう。」

そして剛力のヘルミウスが言葉を発した／

彼は巨人の血筋だった..

「私はあなたの左側に留まろう、

そして、あなたと一緒に橋を守ろう。」

三十一

「ホラティウス」と執政官は言った、

「あなたが言った通り、そのようにして下さい。」

そして、あの巨大な隊列に対してまっすぐに

勇敢な三人は立ち向かっていった。

ローマ人はローマの戦争のためには

土地も金も、

息子も妻も手足も命も惜しまなかった、

昔の勇敢な日々には。

三十二

そのとき、誰も党派を優先しなかった／

そのとき、すべての人々は国家を優先した／

そのとき、金持ちは貧しい人々を助けた、

そして貧しい人々は金持ちを愛していた..

そのとき、土地はフェアに分配された／

そのとき、戦利品はフェアに売られた..

ローマ人は兄弟のようだった

昔の勇敢な日々には。

三十三

今、ローマ人はローマ人を

敵よりも憎む、

そして、護民官は上の者に刃向かい、

そして、元老は下の者を虐げる。

私たちの派閥の争いが熱くなると、

私たちの戦争は冷たくなる..

それゆえ、人々は以前戦ったようには戦わない

昔の勇敢な日々のように。

三十四

三人がその背中に

鎧を引き締めていたとき、

執政官は誰より先に

斧を手にとった..

そして平民たちと混ざり合った元老たちは

手斧、棒、釘抜きを手にとった、

そして、上の板を強打し、

そして、下の支柱を緩めた。

三十五

一方、トスカーナ軍は、

見よ、まさに燦然と、

日の光を照り返しながらやって来て、

横列の後には横列が続き、黄金の広大な海の、

輝く波のようだった。

四百のトランペットが吹き鳴らされ

勇武の歓喜が轟いていた、

整然とした足並みのその偉大な軍勢が、

槍兵を先立てて、軍旗を広げ、

勇敢な三人が立つ橋頭に向かつて

ゆつくりと進んでいたそのとき。

三十六

三人は落ち着いて静かに立っていた、

そして敵を見つめた、

するとすべての前衛たちが

大きな笑い声を上げた…

そして馬に拍車をかけてその深い陣立ての前面に

三人の大將が出て来た／

彼らは地面に飛び降りて、剣を抜き、

そして盾を高く掲げて飛ぶように走って来た

隘路を勝ち取るために／

三十七

緑なすティフェルヌムのアウヌス、

ブドウ畑の丘の主／

そしてセイウス、その八百人の奴隷は

イルバの鉾山にうんざりしている／

そしてピクス、長きに渡る平時と戦時の

クルシウムの家臣、

あの塔に囲まれた灰色の岩山から
ウンブリアの兵を率いて戦いに来た、
ネキナムの要塞から見下ろせるのは
ナル川の淡い波。

三十八

頑強なラルティウスが流れの中へと

アウヌスを投げ落とした／

ヘルミニウスはセイウスを襲った、

そして歯で噛みついた／

勇敢なホラティウスはピクスに

燃えるような一突きを放った／

そして、誇り高きウンブリアの金箔の武器は

血煙の中でガシャンという音を立てた。

三十九

そして、ローマの三人に襲い掛かったのは
ファレリイのオクヌス／

そして海賊

ウルゴのラウスルス／

そして大イノシシ殺しの

ボルジニウムのアルヌス、

彼が殺したのはアルビニアの海岸の

コサの沼地の葦に巣喰つて

畑を荒らし、人々を殺した

大イノシシである。

四十

ヘルミニウスはアルヌスを打ち負かした..

ラルティウスはオクヌスを倒した..

ラウスルスの心臓を

ホラティウスは一撃した。

「この通り」と彼は叫んだ。「海賊は死んだ！

もう、人々はオスティアの城壁から

お前の破壊の船の航跡を見て

仰天したり青ざめたりはしない。

もうカンパニアの女鹿は

お前の呪われた三本の帆を見て

森や洞窟に身を隠すことはない。」

四十一

そして今や敵方から

笑い声は聞こえなくなつた。

先鋒の全員が怒りに満ちた

荒々しい叫び声を上げた。

橋の袂から槍六本の位置で

その長い隊列は停止した。

そして、隘路を勝ち取るために、
前に出てくる者は誰もいなかった。

四十二

しかし、聞けーアストウルが叫んでいる..
そして、見よー兵士たちが道を開ける／
そしてこのルナの偉大な君主は
堂々とした足取りでやって来る。
その広い肩に

四重盾をガランガランと鳴らし、
そして彼以外の誰にも振るうことのできない
剣をその手に打ち振って。

四十三

彼は勇敢なローマ人たちに微笑んだ

穏やかで高貴な微笑み／

彼は怯むトスカーナ人たちに目を向けた、

そしてその目には軽蔑の色があつた。

彼は言つた「雌オオカミの子らが

厳しい窮地に追い詰められている..

しかし、お前たちにも後に続く勇気があるだろうか、

もしもアストウルが道を切り開いたなら？」

四十四

そして、幅広の剣をぐるぐると回しながら

両手で高々と振り上げて、

彼はホラティウスに突進し、

そして、満身の力を込めて打った。

ホラティウスは盾と剣で

まさしく巧みに打撃をかわした。

打撃をかわしたが、間合いが近すぎた／

それは彼の兜を逃したが、太ももを深く切った..
赤い血が流れるのを見て

トスカーナ人たちは歓喜の叫び声を上げた。

四十五

彼はよろめき、そしてヘルミニウスに

寄りかかつて一呼吸をおき／

そして、狂った手負いの山猫のように、

アストウル顔にまともに飛びかかった。

その凄まじい速さの突きは

歯、頭蓋骨、兜を貫き通し、

優れた剣は見事にトスカーナ人の頭の後ろ

一手幅に達した。

四十六

そしてルナの偉大な君主は

その致命的な一撃に倒れた、

アルベルヌス山の檜の木が

雷に打たれて倒れるように…

森全体のはるか遠くまで

巨大な枝を広げていた檜の木である／

そして、青ざめたト占官は低くつぶやいて、

吹き飛ばされた頭を見つめた。

四十七

ホラティウスはアストウルの喉を

かかとでしっかりと押さえつけて、

そして全力で三度四度とぐいぐい引いて、

剣をねじ取った。

「さあ」と彼は叫んだ「やって来い、

天晴な客人よ、ここで待っているものはこれだ！

次はいかなる高貴なルクモが

我がローマの喝采を浴びにやつて来るのか？」

四十八

しかし、彼の不遜な挑戦に対して

そのきらびやかな先陣に走つたのは、

鬱憤と恥と恐れが混じり合つた、

苦々しいざわめきだつた。

豪勇の者には不足しておらず、

君主にふさわしい者も不足していなかつた／

エトルリアの最も高貴な人々は

すべてこの運命の場所にいたのだから。

四十九

しかしエトルリアの最も高貴な人々はみな

地面に転がる血まみれの骸を見て

意気消沈していた、

行く手には勇敢な三人の姿があつた..

そしてその大胆なローマ人たちが立ちふさがっている

恐ろしい橋の袂から、

全員が尻込みした、

それと知らずに森を氣ままに歩き回つていて、

血まみれの骨の真ん中で低いうなり声を上げている、

恐るべき老熊の洞穴に出くわして

脱兎のごとく逃げ出す少年のように。

五十

何よりも大切な

そうした壮絶な攻撃を率いる人物がいなかった／

しかし、後ろの者は「前進！」と叫び

そして、前の者は「後退！」と叫んだ。

そして今や深い陣立ての

後方と前方は浮足立った／

そして剣の海の荒波の中を

軍旗はあちらこちらと漂った／

そして勝利のトランペットの響きは

途切れ途切れになつて消えてしまった。

五十一

それでもひと時一人の男が

馬に乗つて人々の前に出て来た／

三人全員が彼をよく知っていた。

そして大声で挨拶をした。

「さあ、ようこそ、ようこそ、セクストス！

ようこそお帰り！

なぜお前は立ち止まり、背を向けるのか？

「ここを行けばローマなのに。」

五十二

彼は三度街を見た／

彼は三度死者を見た／

そして三度激怒してやって来た、

そして三度恐怖して引き返した..

そして、恐れと憎しみで蒼白になつて、

血の池に溺れた

最も勇敢なトスカーナ人たちが横たわる、

その狭い道を睨みつけた。

五十三

しかしその間、斧と槌は

敢然と仕事に精を出していた／

そして今や、橋はぐらつきながらぶら下がっていた

沸き立つような激流の上に。

「戻つて来い、戻つて来い、ホラティウス！」

大声で元老たち全員が叫んだ。

「戻つて来い、ラルティウス！戻つて来い、ヘルミニウス！

戻つて来い、橋が落ちる前に！」

五十四

スプリウス・ラルティウスが飛ぶように戻った／

ヘルミニウスが飛ぶように戻った..

そして彼らは通り過ぎるとき、その足の下で

材木が割れるのを感じた。

しかし、彼らが振り返ったとき、

対岸に勇敢なホラティウスが

一人立っているのが見えた、

彼らはもう一度渡ろうとした。

五十五

しかし、雷のような轟音とともに

すべての緩められた橋げたが落ちた、

そして、巨大な残骸が横たわつて

流れをダムのようにせき止めた..

そしてローマの城壁から

勝利の長い雄叫びが上がった、

一番高い小塔の上まで

黄色い泡が跳ね上がった。

五十六

そして、乗り馴らされていない馬が

初めて手綱をつけられた時のように、

荒れ狂う川は激しくもがいて、

そして、その黄褐色のたてがみを翻し、

そして沓を引きちぎって、躍り上がって

自由になったことを喜んだ、

そして、渦を巻いて、猛烈にまっしぐらに、

欄干、厚板、橋げたが、

海に向かって突進していった。

五十七

一人で勇敢なホラティウスは立っていた、

しかし、その心は変わらなかった／

前に三万人の三倍の敵、

そして背後に幅広い奔流。

「やつを倒せ！」その青白い顔に笑みを浮かべて

不実のセクストスが叫んだ。

「さあ、降伏しろ」とラルス・ポルセナは叫んだ、

「さあ、降伏して朕に哀れみを乞え。」

五十八

彼は向きを変えた、

あの臆病な兵士たちには目もくれず／

ラルス・ポルセナにものを言うこともなく、

セクストスにものを言うこともなく／

彼は。ラティーンの丘を見て

故国の白い柱廊を見た／

そしてローマの塔のそばを流れている

高貴な川に話しかけた。

五十九

「ああ、テヴェレ川！父なるテヴェレ川！

ローマ人の命、ローマ人の武運を

ローマ人は御身に祈ってきた、

今日この時こそ叶え給え！」

彼はそう言つて、言いながら

傍らの優れた劍を鞘に収め、

そして、背中に鎧を背負つたまま、

真つ逆さまに流れに飛び込んだ。

六十

どちらの岸からも

喜びや悲しみの声は聞こえなかった／

友軍と敵軍は驚きで口もきけずに、

ただ口を開けたまま目を見開いて、

彼が沈んだところを見つめて立ちつくしていた／

そして、大波の上に、

彼の兜が現れるのを見たとき、

すべてのローマ人は狂喜の叫び声を上げた、

そしてトスカーナの兵士たちでさえ

ほとんどが喝采を送らずにいられなかった。

六十一

しかし、流れは猛烈だった、

何カ月もの雨で水かさが大幅に増していた..

そして流血の速度は速かった／

そして痛みは深刻だった、

そして鎧は重く、

そして干戈を交えて疲れていた..

そして何度も沈んだように見えた、

しかし、そのたび彼は浮かび上がって来た。

六十二

そのような悪条件の中で、

そのような荒れ狂う奔流をかき分けて、

無事に上陸場所へと泳ぎ着いた

人物はこれまでいなかったことだろう..

しかし、彼の内なる勇敢な心は

その手足を勇敢に支え、

そして私たちの良き父なるテヴェレは

勇敢に彼の顎を支えた。

六十三

「呪われてあれ！」不実のセクストスは言った／

「この悪党めが溺れてしまわないものだろうか？

もしここで足止めされていなかったなら、

今日のうちに町を略奪しているはずだったのに！」

「天よ、かの男を助け給え！」とワルス・ポルセナは言った

「そして無事に岸へと送り届け給え／

このような戦場の武勇は

いまだかつて見たことがない。」

六十四

そして今や彼は川底に足がつくのを感じる／

今や乾いた土に立つ／

今や周りに元老たちが群がっている／

その血みどろの手を握りしめるために／

そして今や叫びと拍手、

そして大きな泣き声とともに、

彼は川の門に入る

歓喜する群衆に伴われて。

六十五

彼らは彼に公的権利として

小麦の畑を与えた、

朝から夜まで耕すことができる

二頭の強い牡牛をも与えた／

そして彼らは鑄像を作り、

そしてそれを高いところに据えた、

そして私が言ったことが嘘ではない証拠に

それは今日も立っている。

六十六

それはコミティウムに立っていて

誰でも見ることができる／

鎧をつけたホラティウスが、

片膝をついて休んでいるのを..

そしてその下には、

すべてが金の文字で書かれている、

いかに勇気を持つて彼が橋を守ったかということが

昔の勇敢な日々に。

六十七

その名の響きは今もローマの人々を
鼓舞している、

ヴォルスキ族の本国への突貫を叫ぶ

トランペットの響きのように／

そして妻たちは今もジユノーに祈る

男の子たちが勇敢に育ちますように、と

橋をととてもよく守った彼のように

昔の勇敢な日々に。

六十八

そして冷たい北風が吹き、

そして雪の中から、

オオカミの長い遠吠えが聞こえてくる

冬の夜／

人里離れた田舎家の周りを

大きな音を立てて大嵐が吹き荒れ、
そしてアルジドスの良い丸太が軋んで
家の中でさらに大きな音を立てているとき／

六十九

最も古い樽が開けられ、
そして、最も大きなランプに火が灯され／
燠火の中で栗が柔らかく輝くとき、
そして、子供は串をひっくり返し／
老いも若きも燃える木の周りに
集まって輪になつて／
少女たちが籠を編んでいるとき、
そして、若者たちが弓を矯めているとき／

七十

良い男が彼の鎧を修理して、

そして兜の羽を整えているとき／

良い妻の杼が楽し気に

織機の間を閃いて行くとき／

泣きながら笑いながら

なおも物語は語り継がれている、

どのように良くホラティウスが橋を守ったのか

昔の勇敢な日々に。

2021.4.21